

チョウから見える川越の環境

— 2011 年～2022 年の記録 —

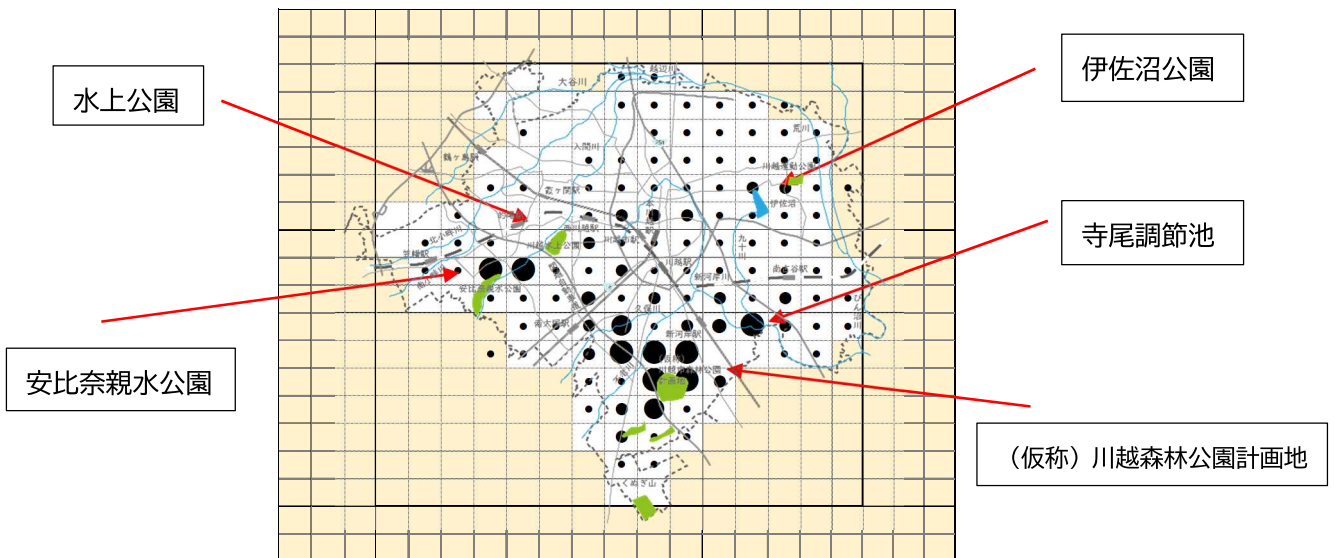


2024 年 2 月 24 日

かわごえ環境ネット自然環境部会

目 次

1.	はじめに—12年間の歴史	3 ページ
2.	チョウのモニタリング結果から	
	(1) 全体の結果から	4
	(2) チョウの種数の変化	5
	(3) この12年間で観察されたチョウの一覧	6
	(4) チョウごとの出現時期	7
3.	個別チョウごとの変化	
	(1) アゲハチョウ科	10
	(2) シジミチョウ科	10
	(3) シロチョウ科	11
	(4) セセリチョウ科	11
	(5) タテハチョウ科	12
4.	川越市内での主なチョウの分布	13
5.	環境の違いによるチョウ	
	(1) メッシュコード内のチョウ	17
	(2) 寺尾調節池	18
6.	チョウによる環境指標	
	(1) 「(仮称)川越市森林公園」計画地	20
	(2) 寺尾調節池	21
	(3) 住宅地	21
7.	川越のチョウの歴史	22
8.	川越で見られるチョウたち	24
9.	川越のチョウの未来は	
	(1) チョウの生態的地位は	33
	(2) 市内環境によるチョウの変化	33
	(3) 絶滅が心配されるチョウたち	33
	(4) チョウを含む生き物を保全するためには	34
10.	まとめを発行するにあたって	35



チョウ 川越市及び周辺分布図

1 はじめにー12年間の歴史

チョウはどこにでもおり、華麗に舞う。そのライフサイクルは食草に産みつけられた卵から芋虫の幼虫を経て蛹から変身して大空に羽ばたく身近で憧れの存在でした。しかし人の生活と共存してきたチョウが生息環境の変化で姿を消しつつあることを知りませんでした。あまりに人の生活の中で当たり前になっていたからでしょうか。

2008年頃から「埼玉昆虫談話会」が昆虫の移入種についての調査を始めており、移入種のチョウーアカボシゴマダラーが社会的な関心を持たれたのを機会に市内のチョウの調査が始まりました。2011年には埼玉県から講師を招いて「生物多様性講座」を開き、「川越市の生きもの」を考えるスタートとなりました。その後、かわごえ環境ネット自然部会の呼びかけで、2012年から講座参加者を中心にして市内のチョウの調査を開始しました。

2013年からはモニターのスキルアップと観察精度の向上をめざして「自然観察の手引きー川越のチョウ」(2018年に改訂)を発行してきました。同時に部会で、会員講師の猪俣昇氏の指導のもと、「水上公園」、「安比奈親水公園」、「(仮称)川越森林公園計画地」などで現地観察会を実施し、実際のチョウを捕獲しそれに触れて親しんできました。

2014年には川越市環境政策課が市民に呼び掛けて市内のチョウの調査を実施しました。2017年から埼玉県のモニタリング調査と合わせて市内の広範囲のチョウの調査を行ってきました。2017年からは川越市とかわごえ環境ネット自然環境部会が呼びかけた「市民生きもの調査」がスタートしました。そのために、指標種を中心とした生きもの調査(チョウも含む)をより広範囲の調査を行うことができました。2019年からは自宅周辺の定点観察からより広域的にかつ継続的にモニタリングを行ってきました。10年間のモニタリング結果は、「市民の力を集めた生きもの調査」ー川越のチョウと昆虫の記録ー(2020年3月13日)にまとめました。

その後、植物を中心にチョウを含めた「市民生きもの調査」が続けられて、チョウだけで6500件を超えるビッグデータとなりました。

調査にあたって、チョウは次の特徴を持っています。

- ① 生態系の中で中位に位置する。
- ② 食草から蜜源まで生育ステージに合わせて幅広い自然環境を必要とする。
- ③ 比較的緩慢に移動するので多くの人に観察しやすい。
- ④ 身近な生きもので親しみがあり関心を持たれやすい。
- ⑤ 人の生活に近い場所で見つかりやすい。
- ⑥ 全国的にも種数は240種ほどで見分けが付きやすい。



Fig 1 観察手引き



Fig. 2 現地観察会

このような特徴からチョウは自然環境の変化に敏感なために環境指標として用いられています。現在、チョウの置かれている現状は、

- ① 開発、汚染、乱獲、過剰利用など人間活動に伴う影響
- ② 里山の荒廃など、人間活動の縮小や生活スタイルの変化に伴う影響
- ③ 外来生物や化学物質など、人間活動によって新たな問題となっている影響
- ④ 地球温暖化の進行が、生物多様性に与える影響

によって草原性や森林性のチョウが大きく減少しています。（「日本のチョウ」（日本チョウ類保全協会編）からの引用）

このために、市内のチョウの実態を把握してそれを記録として残し、市内の自然環境との関連を知ることが必要と考え、これまで継続した観察を行ってきました。これまでのデータを解析し、新たな知見を加えて、川越のチョウの12年間をまとめました。

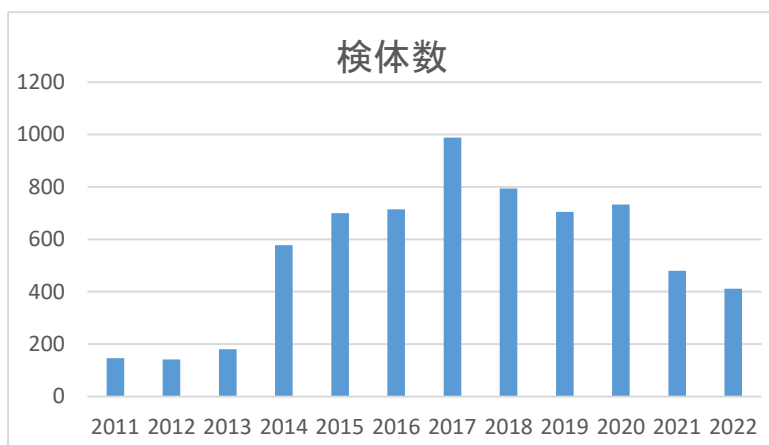
2 チョウのモニタリング結果から

チョウの観察時期は3月から11月までの9か月となります。成虫（チョウ）で越冬したルリタテハ、キタテハ、ヒオドシチョウなどは早春の温かい日にその姿を現します。寒さを卵やさなぎで過ごしたモンシロチョウなどは食草が芽生える春になってからその姿を現します。春から夏は多くのチョウが出現してにぎやかになります。この時期はチョウの観察に最も適している時期となります。

秋になると一斉に増えて北上するのはイチモンジセセリやウラナミシジミなどのチョウです。これらのチョウの出現に合わせてモニタリングするには継続した観察が必要となります。また、チョウによっては1年に数回出現するチョウもあり継続して調査するとその傾向を知ることができます。特にヒオドシチョウは1年に1化で夏眠することが知られています。また、ミヤマセセリは4月の早い時期に年に一度だけ姿を現しますので、時期を合わせた観察が必要となってきます。

（1）全体の結果から

2011年からチョウの調査を開始しています。初めは参加者が少なく限られた場所での調査となっていました。

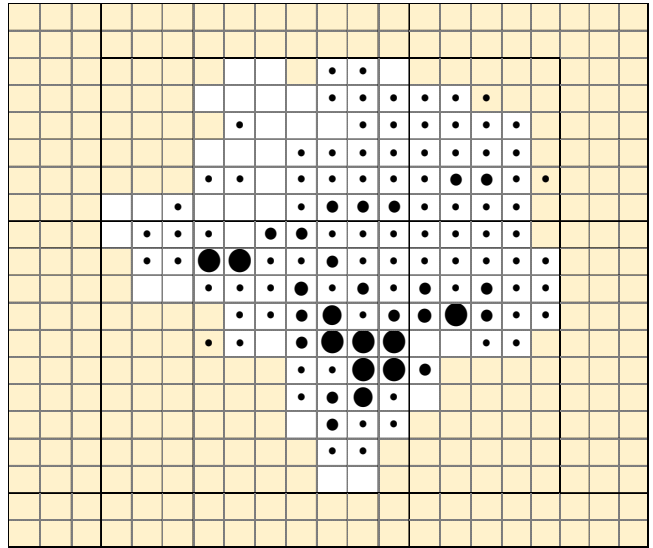


2014年からは参加者も増えて定点調査も広がってきました。これを決定的に変えたのは、2017年から始まった市民参加による「生きもの調査」です。そして参加者の居住付近から市内全域へその調査対象が広がりました。調査が進むにつれて2021年からは定点での継続した調査に切り替えました。

Fig. 3 観察検体数の変化

その結果は合計で6500件を超える検体数となりました。また、観察したメッシュは111メッシュとなり、市内のほぼ全域をカバーすることができました。調査時期も3月から12月にわたりました。(右の分布図)

この数年間は蓄積された経験と観察から市内でのチョウの分布が明らかになってきました。また、チョウの生息環境と自然環境との関係が次第に判るようになってきて観察調査の精度も向上してきています。



チョウ 川越市及び周辺分布図

(2) チョウの種数の変化

チョウの発生は年により変動があることは知られています。もちろん環境による変化もありますし、観察者の人数や観察場所およびその頻度によっても変化します。観察者が増えることで見つかるチョウの種類も多くなります。2014年からは参加者が増えたことで、50種ほどのチョウが見つかっています。全体では62種(ほかに1種ありリュウキュウムラサキで川越では普通は生存しない種です)ですが、普通に見られるのは50種ほどです。

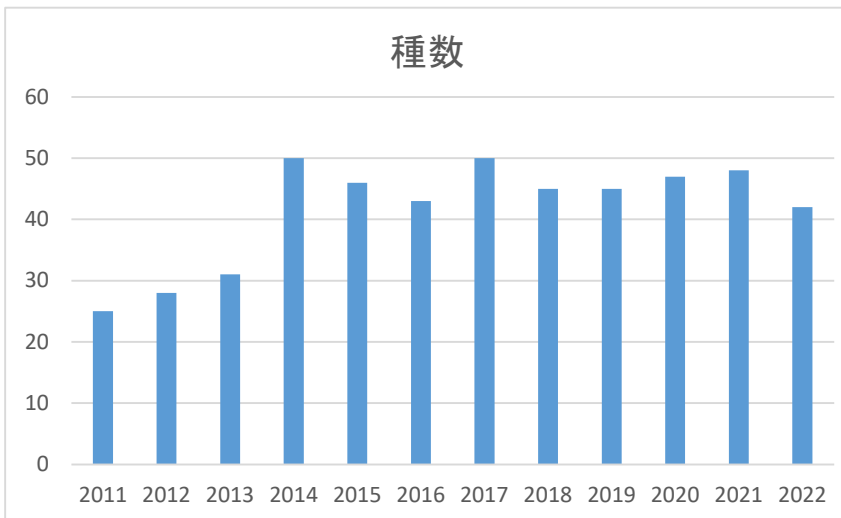


Fig. 4 チョウの種数変化

チョウの科ごとに見ると、アゲハチョウ科が9種となっています。シジミチョウ科は12種、シロチョウ科は5種、セセリチョウ科は11種、そしてタテハチョウ科は最多で25種です。

市内では、河川敷、平地林、耕作地、市街地、水田など多様な環境が存在し、多くのチョウを観察することができます。チョウの種ごとにまとめた主な観察件数は Fig.5 の通りです。

す。

最も多いのはモンシロチョウで、目立ちやすいのとアブラナ科の食草が広く分布しているのがその理由と考えられます。2目に多いのがヤマトシジミで、狭い場所でも食草のカタバミがあれば生息できる強みを持っているからでしょう。第3はナミアゲハで大きなチョウとしては庭のミカン科の木を食草としており、かつ移動距離が大きいことも影響しているのかもしれない。

5, 6番目にツマグロヒョウモンとアカボシゴマダラが入っていますが、前者は温暖化と

栽培種スミレの増加で北上して市内で定着しています。後者は意図的放チョウにより生態系のギャップに入り込んでおり、最近定着し増加しているチョウです。

同じ黄色のチョウの「キタキチョウとモンキチョウ」は生息環境が違った場所で見ることができます。キタキチョウは林縁を主に、モンキチョウは開けた場所に多く見られ、観察場所はナミアゲハに次いで多く、市内ではポピュラーなチョウです。

クズを食草とし林縁に生息し、飛行が滑るように飛ぶコムスジは比較的多くの場所で観察されています。これは手入れがされない緑地が広がっている表れかもしれません。

雑木林や比較的暗い社寺林に生息するサトキマダラヒカゲやヒカゲチョウは、観察数は比較的多いのですが、観察場所はそれほど多くありません。またルリタテハはユリ科の食草の存在と樹液を餌として樹林地を生息環境にしているので観察場所は限られています。

開放的な場所を好むベニシジミ、キタテハやツバメシジミは観察場所が多くなっています。ベニシジミは大小の河川敷の草地や水田地帯の水路そばに多く見られ林に続く空き地でもその姿を確認でき広い範囲で見ることができます。ツバメシジミは河川堤防、公園や農地など背の低い草地など様々な環境で見ることができます。また、ヒメウラナミジャノメは水辺近くの草地でよく見かけます。

観察数が多い順					
	種名	科名	観察件数	場所数	メッシュ数
1	モンシロチョウ	シロチョウ	722	260	96
2	ヤマトシジミ	シジミチョウ	560	174	75
3	ナミアゲハ	アゲハチョウ	536	164	74
4	キタキチョウ	シロチョウ	456	86	50
5	ツマグロヒヨウモン	タテハチョウ	346	72	46
6	アカボシゴマダラ	タテハチョウ	309	74	45
7	コムスジ	タテハチョウ	249	60	39
8	モンキチョウ	シロチョウ	234	103	62
9	クロアゲハ	アゲハチョウ	233	45	31
10	サトキマダラヒカゲ	タテハチョウ	208	43	26
11	キタテハ	タテハチョウ	199	58	34
12	ヒカゲチョウ	タテハチョウ	196	41	23
13	ルリタテハ	タテハチョウ	193	26	15
14	ベニシジミ	シジミチョウ	181	78	62
15	キアゲハ	アゲハチョウ	162	42	31
16	イチモンジセセリ	セセリチョウ	161	52	33
17	アオスジアゲハ	アゲハチョウ	156	56	37
18	ツバメシジミ	シジミチョウ	120	56	46
19	テングチョウ	タテハチョウ	114	46	20
20	ヒメウラナミジャノメ	タテハチョウ	98	40	32

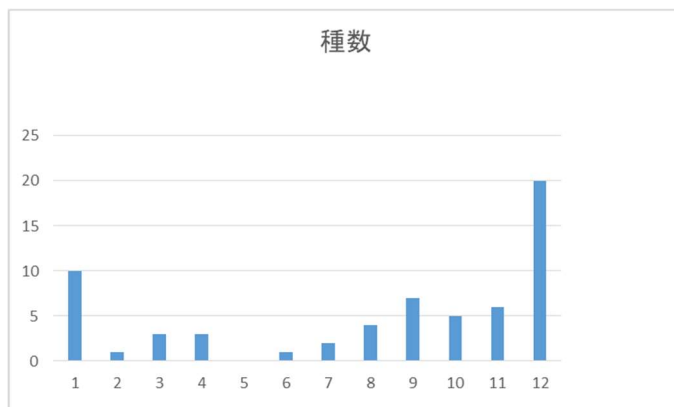
Fig. 5 観察数ごとのチョウ

(3) この12年間で観察されたチョウの一覧

次の表の通りです。(8ページ参照)

これまで観察例が少なかったチョウの再発見がされています。ギンイチモンジセセリは寺尾調節池や豊田本町、池辺公園で、コチャバネセリは安比奈親水公園で、ミヤマチャバネセリは寺尾調節池で新たに見つかっています。

この12年間で観察されたチョウは62種になります。市内全地域での同じような調査が行われているわけではないのでチョウの出現に変化はあります。毎年ごとに観察されたチョウは20種で市内でのポピュラーなチョウ



として生息しています。(6ページの表参照) この中にはナミアゲハ、ヤマトシジミ、モンシロチョウなど観察事例が多いチョウが含まれています。他にもイチモンジセセリ、ダイミョウセセリ、キタテハ、コムスジ、ヒメアカタテハなどおなじみのチョウも見つかっています。また、地域は限定されていますが雑木林に生息するアカシジミ、ウラナミアカシジミも含まれておりこれは観察する努力の結果です。また、アカボシゴマダラ、ツマグロヒョウモンは近年増加してきたチョウで市内での定着と分布拡大しているのが毎年見つかる理由です。

9回以上の出現するチョウを合わせると38種で61%となり経験的にこれらのチョウが安定的に生息していると言えるでしょう。6回から8回までのチョウは生息場所がかなり限定されて発生も不安定となっており、特にジャコウアゲハは河川周辺、ヒメジャノメ、アサマイチモンジは明るい林地周辺、ツマキチョウは開けた草地で環境自体も不安定となっている場所が多くなっています。

4回以下の出現しかないチョウは絶滅の危険があるチョウと言えます。ギンイチモンジセセリとミヤマセセリは生息場所が数カ所に限定されており、要注意です。1回しか観察されていない10種は、絶滅の危機が迫っており、その後の変化を含めて観察を継続する必要があります。かなり専門的な観察を必要としており今後の大きな課題となっています。

(4) チョウごとの出現時期

表の通りです。(9ページ参照)

チョウの観察期間は3月から11月までですが、5月から9月までが最も多く、最近では温暖化で12月初めまで出現が延長されていること、観察が継続されているので2月にも見つかることがあります。チョウの生態から、種によっては多化性(1年間に3回以上世代を繰り返す性質)もありほぼ1年中見られることもあります。

観察例が少ないチョウについては出現時期の特定が難しく今後の課題と思われます。特に雑木林に依存しているアカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミズイロオナガシジミは5、6月のみの出現です。明るい雑木林に生息するミヤマセセリは早春のチョウで4月のみの観察となっています。そのために、時期や生息場所が限定されるチョウの観察はその生息場所と時期が重要となってきますので、複数年の観察努力が必要となっています。

イチモンジセセリ、チャバネセセリ、ウラナミシジミは秋になるとその数を増やすので観

察しやすくなりますが蜜源のニラなどの花の時期に合わせる必要がありますのでのんびり
 はできません。そしてイチモンジセセリはイネ、ウラナミシジミは豆の害虫として嫌われて
 おり、食草の成長に合わせての出現することになります。

12年間の観察されたチョウ		(年)												
種名	科名	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	
1	アオスジアゲハ	アゲハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
2	オナガアゲハ	アゲハチョウ			○	○		○						
3	カラスアゲハ	アゲハチョウ		○	○	○	○	○			○		○	
4	キアゲハ	アゲハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
5	クロアゲハ	アゲハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
6	ジャコウアゲハ	アゲハチョウ			○	○	○	○	○	○		○		
7	ナガサキアゲハ	アゲハチョウ		○		○	○	○	○	○	○	○	○	
8	ナミアゲハ	アゲハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
9	モンキアゲハ	アゲハチョウ				○								
10	アカシジミ	シジミチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
11	ウラギンシジミ	シジミチョウ	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
12	ウラゴマダラシジミ	シジミチョウ				○								
13	ウラナミアカシジミ	シジミチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
14	ウラナミシジミ	シジミチョウ				○	○	○	○	○	○	○	○	
15	ツバメシジミ	シジミチョウ				○	○	○	○	○	○	○	○	
16	ベニシジミ	シジミチョウ	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
17	ミズイロオナガシジミ	シジミチョウ				○	○	○	○	○	○	○	○	
18	ムラサキシジミ	シジミチョウ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
19	ムラサキツバメ	シジミチョウ			○	○		○	○	○	○	○	○	
20	ヤマトシジミ	シジミチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
21	ルリシジミ	シジミチョウ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	
22	キタキチョウ	シロチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
23	スジグロシロチョウ	シロチョウ				○	○	○	○	○	○	○	○	
24	ツマキチョウ	シロチョウ				○	○		○	○	○			
25	モンキチョウ	シロチョウ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
26	モンシロチョウ	シロチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
27	イチモンジセセリ	セセリチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
28	オオチャバネセセリ	セセリチョウ				○			○		○			
29	キマダラセセリ	セセリチョウ	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	
30	コチャバネセセリ	セセリチョウ					○							
31	ギンイチモンジセセリ	セセリチョウ				○		○				○	○	
32	ダイミョウセセリ	セセリチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
33	チャバネセセリ	セセリチョウ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	
34	ヒメキマダラセセリ	セセリチョウ					○							
35	ホソバセセリ	セセリチョウ				○								
36	ミヤマセセリ	セセリチョウ							○	○	○			
37	ミヤマチャバネセセリ	セセリチョウ										○		
38	アカタテハ	タテハチョウ	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	
39	アカボシゴマダラ	タテハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
40	アサギマダラ	タテハチョウ	○											
41	アサマイチモンジ	タテハチョウ				○	○	○		○	○	○	○	
42	イチモンジチョウ	タテハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
43	ウラギンヒョウモン	タテハチョウ					○	○						
44	ウラナミジャノメ	タテハチョウ					○	○			○	○		
45	キタテハ	タテハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
46	クロノマチョウ	タテハチョウ			○			○	○	○	○	○	○	
47	コジャノメ(※1)	タテハチョウ										○		
48	ゴマダラチョウ	タテハチョウ	○			○	○	○	○	○	○	○		
49	コムスジ	タテハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
50	コムラサキ	タテハチョウ						○		○	○	○		
51	サトキマダラヒカゲ	タテハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
52	ジャノメチョウ	タテハチョウ						○						
53	ツマグロヒョウモン	タテハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
54	テングチョウ	タテハチョウ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
55	ヒオドシチョウ	タテハチョウ				○	○	○	○	○	○	○	○	
56	ヒカゲチョウ	タテハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
57	ヒメアカタテハ	タテハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
58	ヒメウラナミジャノメ	タテハチョウ				○	○	○	○	○	○	○	○	
59	ヒメジャノメ	タテハチョウ				○		○	○	○	○	○	○	
60	ミスジチョウ	タテハチョウ						○						
61	ミドリヒョウモン	タテハチョウ		○	○	○	○	○		○		○	○	
62	ルリタテハ	タテハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
※1ヒメジャノメかも			25	28	31	50	46	43	50	45	45	47	48	42

チョウの出現時期

種名	科名	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1 アオスジアゲハ	アゲハチョウ			○	○	○	○	○	○	○		
2 オナガアゲハ	アゲハチョウ						○	○	○			
3 カラスアゲハ	アゲハチョウ			○	○	○	○	○	○			
4 キアゲハ	アゲハチョウ			○	○	○	○	○	○	○		
5 クロアゲハ	アゲハチョウ			○	○	○	○	○	○	○	○	
6 ジャコウアゲハ	アゲハチョウ			○	○	○	○	○	○			
7 ナガサキアゲハ	アゲハチョウ			○	○	○	○	○	○	○		
8 ナミアゲハ	アゲハチョウ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
9 モンキアゲハ(※)	アゲハチョウ							○	○			
10 アカシジミ	シジミチョウ				○	○						
11 ウラギンシジミ	シジミチョウ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
12 ウラゴマダラシジミ(※)	シジミチョウ				○							
13 ウラナミアカシジミ	シジミチョウ				○	○	○					
14 ウラナミシジミ	シジミチョウ							○	○	○	○	○
15 ツバメシジミ	シジミチョウ			○	○	○	○	○	○	○		
16 ベニシジミ	シジミチョウ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
17 ミズイロオナガシジミ	シジミチョウ				○	○	○					
18 ムラサキシジミ	シジミチョウ			○	○	○	○	○	○	○	○	○
19 ムラサキツバメ	シジミチョウ					○	○	○	○	○	○	○
20 ヤマトシジミ	シジミチョウ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
21 ルリシジミ	シジミチョウ			○	○	○	○		○	○		
22 キタキチョウ	シロチョウ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
23 スジクロシロチョウ	シロチョウ			○	○	○	○	○	○	○		
24 ツマキチョウ	シロチョウ			○	○		○					
25 モンキチョウ	シロチョウ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
26 モンシロチョウ	シロチョウ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
27 イチモンジセセリ	セセリチョウ				○	○	○	○	○	○	○	
28 オオチャバネセセリ	セセリチョウ							○	○	○		
29 キマダラセセリ	セセリチョウ				○	○	○	○	○			
30 ギンイチモンジセセリ	セセリチョウ					○	○	○	○			
31 コチャバネセセリ(※)	セセリチョウ						○					
32 ダイミョウセセリ	セセリチョウ			○	○	○	○	○	○	○		
33 チャバネセセリ	セセリチョウ						○	○	○	○	○	
34 ヒメキマダラセセリ(※)	セセリチョウ							○				
35 ホソバセセリ(※)	セセリチョウ								○			
36 ミヤマセセリ	セセリチョウ			○								
37 ミヤマチャバネセセリ(※)	セセリチョウ							○				
38 アカタテハ	タテハチョウ			○	○	○		○	○	○	○	
39 アカボシゴマダラ	タテハチョウ			○	○	○	○	○	○	○	○	
40 アサギマダラ(※)	タテハチョウ								○			
41 アサマイチモンジ	タテハチョウ				○	○	○	○	○	○		
42 イチモンジチョウ	タテハチョウ			○	○	○	○	○	○	○		
43 ウラギンヒョウモン	タテハチョウ								○			
44 ウラナミジャノメ	タテハチョウ				○			○	○			
45 キタテハ	タテハチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
46 クロコノマチョウ	タテハチョウ		○		○	○	○	○	○	○	○	○
47 コジャノメ	タテハチョウ							○	○	○		
48 ゴマダラチョウ	タテハチョウ				○	○	○	○	○			
49 コミスジ	タテハチョウ			○	○	○	○	○	○	○	○	
50 コムラサキ	タテハチョウ				○	○	○	○	○	○		
51 サトキマダラヒカゲ	タテハチョウ			○	○	○	○	○	○	○		
52 ジャノメチョウ(※)	タテハチョウ								○			
53 ツマクロヒョウモン	タテハチョウ			○	○	○	○	○	○	○	○	○
54 テングチョウ	タテハチョウ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	
55 ヒオドシチョウ	タテハチョウ		○	○	○	○						
56 ヒカゲチョウ	タテハチョウ				○	○	○	○	○	○		
57 ヒメアカタテハ	タテハチョウ			○	○	○	○	○	○	○	○	
58 ヒメウラナミジャノメ	タテハチョウ			○	○	○	○	○	○	○		
59 ヒメジャノメ	タテハチョウ			○	○	○	○	○	○	○		
60 ミスジチョウ(※)	タテハチョウ				○							
61 ミドリヒョウモン	タテハチョウ					○		○	○	○		
62 ルリタテハ	タテハチョウ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	

※ 観察例が少ないので時期が少し不正確

3 個別チョウごとの観察場所数と観察件数の変化

(1) アゲハチョウ科 9種が見つかっています。ナミアゲハが最も多く見つかっており、

種名	科名	観察件数	場所数	メッシュ数
ナミアゲハ	アゲハチョウ	536	164	74
クロアゲハ	アゲハチョウ	233	45	31
キアゲハ	アゲハチョウ	162	42	31
アオスジアゲハ	アゲハチョウ	156	56	37
ナガサキアゲハ	アゲハチョウ	68	20	15
ジャコウアゲハ	アゲハチョウ	27	11	10
カラスアゲハ	アゲハチョウ	26	11	9
オナガアゲハ	アゲハチョウ	4	3	3
モンキアゲハ	アゲハチョウ	2	1	1

観察件数と観察場所が市内の半分ほどのメッシュで観察されます。アゲハチョウは体が大きく移動能力が高いため、見つけやすいのですが、飛行能力が高く、種の判別には熟練が要求されます。ナミアゲハとクロアゲハは住宅地のミ

カン科の植物に依存しています。

ナミアゲハと似ているキアゲハはセリ科の植物を食草として生息は畑（家庭菜園）が主な場所です。アオスジアゲハはクスノキ科が食草で、植栽されたクスノキが主な生息場所です。ナガサキアゲハは関西方面に多いチョウでしたが、温暖化で北上して最近では市内に定着してミカン科の植栽がその生息範囲を広めており、クサギの花などに来て吸蜜しています。

飛行が緩やかで水辺で見られるジャコウアゲハは食草のウマノスズクサが生息している河川周辺で観察されます。入間川流域の安比奈親水公園、池辺公園、水上公園、小畔川と広範囲に観察されます。また、新河岸川では寺尾調節池周辺で観察されています。カラスアゲハは野生などのミカン科の樹木を食草としており森林環境を好むために川越では観察数が少なくなっています。オナガアゲハ、モンキアゲハは安比奈親水公園での観察だけで限定された生息となっています。



Fig. 6 ナミアゲハ

(2) シジミチョウ科 12種が見つかっています。断トツに多いのはヤマトシジミです。

種名	科名	観察件数	場所数	メッシュ数
ヤマトシジミ	シジミチョウ	560	174	75
ベニシジミ	シジミチョウ	181	78	62
ツバメシジミ	シジミチョウ	120	56	46
ウラナミアカシジミ	シジミチョウ	83	17	11
ムラサキシジミ	シジミチョウ	83	19	13
アカシジミ	シジミチョウ	70	20	11
ウラギンシジミ	シジミチョウ	63	24	16
ミズイロオナガシジミ	シジミチョウ	44	13	8
ウラナシジミ	シジミチョウ	43	19	14
ルリシジミ	シジミチョウ	30	14	10
ムラサキツバメ	シジミチョウ	18	8	8
ウラゴマダラシジミ	シジミチョウ	1	1	1

食草のカタバミがある狭い場所でも見つけることができモンシロチョウに続き多い観察件数となっています。ベニシジミとツバメシジミは開けた環境で見られ、河川の土手やそこに続く草はらでよく見ることができます。そのために、多くの観察例が報告されています。雑木林で見られるアカシジ

ミ、ウラナミアカシジミとミズイロオナガシジミはコナラを食草として雑木林のコナラやクヌギに依存して生息しています。それらのチョウの分布は雑木林の分布と一致しています。しかし、ウラナミアカシジミは比較的手入れが行われ萌芽更新の雑木林を好みますので、残された林を保全し手入れや萌芽更新を行うことで、これらのチョウの生息が確保できると考えられます。



Fig. 7 ウラナミアカシジミ

全体としては上位3位までを除く9種は観察件数や場所数も少なく絶滅の危険は高くなっています。一方、カシヤシイが食草で温暖化により北上しているムラサキツバメが林の中で成虫(チョウ)で冬越しする姿を見られるようになってきて、川越では定着しています。

秋になって急速に個体数を増やすウラナミシジミは、家庭菜園を中心に見ることができます。晩秋にはクズの葉の上で越冬前のウラギンシジミが飛び交っているのを見ることができます。

(3) シロチョウ科 5種が見つっています。チョウの中でも全体的に種数が少なく市内

種名	科名	観察件数	場所数	メッシュ数
モンシロチョウ	シロチョウ	722	260	96
キタキチョウ	シロチョウ	456	86	50
モンキチョウ	シロチョウ	234	103	62
スジグロシロチョウ	シロチョウ	44	18	17
ツマキチョウ	シロチョウ	17	15	10

では5種しか見つかりませんでした。モンシロチョウは観察件数、観察場所、メッシュ数も断トツで多く、市内のいたる所

で見つけることができます。食草はアブラナ科でキャベツなどの栽培植物を好み、家庭菜園や畑に多く見られます。水田では農家の周辺や耕作放棄地の空き地に多く見られます。出現期間は長く3月から12月までと長い期間見ることができます。キタキチョウとモンキチョウは比較的多くの地域で観察されており、混在することはありますが、キタキチョウは主に林縁で、モンキチョウは開けた草地で見ることができます。



Fig. 8 モンシロチョウ

一方、スジグロシロチョウは比較的暗い環境や湿った環境を好み、林の林縁などで生息しています。そのために、市内での生息は限定されています。ツマキチョウは林縁や河原、農地周辺で見られますが、市内では限定された場所では観察されていません。

(4) セセリチョウ科 11種のチョウをこれまでに観察しています。最も多いのはイチモンジセセリで秋になると急速に増えてニラの花でその姿を多く見ることができます。ダイミョウセセリとキマダラセセリは林縁で見られ市内では限定された場所になります。セセリチョウではイチモンジセセリとチャバネセセリが多く、コチャバネセセリ、ミヤマチャバネセ

セリは少ない分布です。河川のそばで見られるギンイチモンジセセリ、コチャバネセセリは準絶滅種Ⅱ類です。

明るい雑木林で見られるミヤマセセリも川越市内では2カ所（近接した）で観察される絶滅危惧種Ⅰ類です。

セセリチョウ科はイチモンジセセリを除いては限定された場所に見られることが多く、場所によっては混在

しているので見分けを難しくしています。しかし、全体的にセセリチョウは明るく開けた環境が必要で河川敷や林縁周辺の草地の保全が必要となります。

(5) タテハチョウ科 川越では25種のチョウが観察されています。最も多いのはツマグロヒョウモンとアカボシゴマダラです。前者は温暖化と食草の栽培種スマレの増加で観察される場所も増加し市内で定着し分布を広げています。アカボシゴマダラは人為的な放チョウで



Fig. 9 イチモンジセセリ

その数を増やして雑木林やその周辺ではゴマダラチョウを圧倒しています。

コムスジはクズを食草として林縁に見られます。キタテハはカナムグラを食草としており河川敷の土手など開けた場所や畑周辺で見ることができます。サトキマダラヒカゲやヒカゲチョウは比較的暗い雑木林や社寺林、農家の屋敷林で見ることができ、広い範囲で細々と生き続けています。分布を広げているのか残存種なのか今後の観察が必要でしょうか。

ルリタテハ、イチモンジチョウやテングチョウは林や林縁で見つけることができます。ゴマ

種名	科名	観察件数	場所数	メッシュ数
イチモンジセセリ	セセリチョウ	161	52	33
ダイミョウセセリ	セセリチョウ	77	21	14
キマダラセセリ	セセリチョウ	21	10	9
チャバネセセリ	セセリチョウ	18	11	10
オオチャバネセセリ	セセリチョウ	5	3	3
ギンイチモンジセセリ	セセリチョウ	5	3	3
ミヤマセセリ	セセリチョウ	5	2	2
コチャバネセセリ	セセリチョウ	1	1	1
ヒメキマダラセセリ	セセリチョウ	1	1	1
ホソバセセリ	セセリチョウ	1	1	1
ミヤマチャバネセセリ	セセリチョウ	1	1	1

種名	科名	観察件数	場所数	メッシュ数
ツマグロヒョウモン	タテハチョウ	346	72	46
アカボシゴマダラ	タテハチョウ	309	74	45
コムスジ	タテハチョウ	249	60	39
サトキマダラヒカゲ	タテハチョウ	208	43	26
キタテハ	タテハチョウ	199	58	34
ヒカゲチョウ	タテハチョウ	196	41	23
ルリタテハ	タテハチョウ	193	26	15
テングチョウ	タテハチョウ	114	46	20
ヒメウラナミジャノメ	タテハチョウ	98	40	32
イチモンジチョウ	タテハチョウ	92	26	16
ヒメアカタテハ	タテハチョウ	85	28	21
クロコノマチョウ	タテハチョウ	62	12	8
ヒメジャノメ	タテハチョウ	36	19	16
アカタテハ	タテハチョウ	31	19	13
ゴマダラチョウ	タテハチョウ	29	14	10
ヒオドシチョウ	タテハチョウ	16	13	10
アサマイチモンジ	タテハチョウ	14	7	6
ミドリヒョウモン	タテハチョウ	13	4	3
コムラサキ	タテハチョウ	8	5	4
ウラナミジャノメ	タテハチョウ	7	4	3
コジャノメ	タテハチョウ	5	3	3
ウラギンヒョウモン	タテハチョウ	2	1	1
アサギマダラ	タテハチョウ	1	1	1
ジャノメチョウ	タテハチョウ	1	1	1
ミスジチョウ	タテハチョウ	1	1	1

ダラチョウとヒオドシチョウは限られた林で見られ絶滅が心配されています。ヒメジャノメとコムラサキは主に水辺近くで観察されており、コムラサキの食草はヤナギなので分布が限定されています。クロノマチョウは温暖化で北上しており「(仮称)川越森林公園計画地」ではススキの葉に幼虫を見つけました。比較的暗い環境を好むので、数カ所の雑木林で見つかっています。

渡りをするチョウのアサギマダラは川越で見られるのが珍しいです。また、ミスジチョウやジャノメチョウは発見するのが珍しいチョウとなっています。

4 川越市内での主なチョウの分布

市内で62種のチョウが見られます。そのうちよく観察されるチョウ、自然環境の変化で依存しており絶滅が危惧されるチョウや、温暖化で北上し分布を広げているチョウなどを考えてみます。

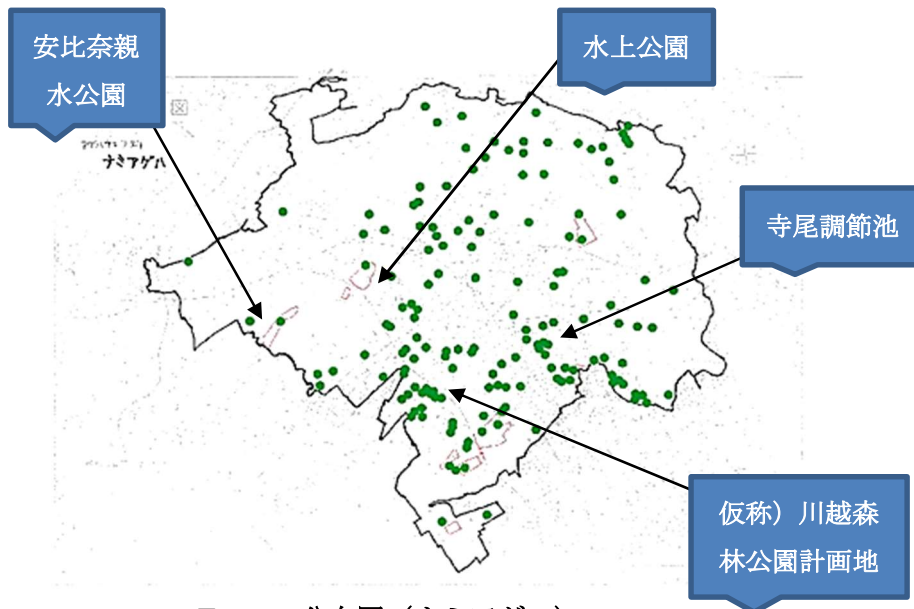


Fig. 10 分布図 (ナミアゲハ)

まず、アゲハチョウ科では、市街地や農地から林縁まで幅広く見られる最も広い分布を示すナミアゲハ (アゲハチョウ) (※Figure 10)、畑のセリ科の植物に依存しそこで活動するキアゲハ、住宅地のミカン科の植物に依存しているクロアゲハ、現在は少なくなったカラスアゲハなど大きくて飛行力も高いアゲハチョウは良く目立ちます。少し体の小さいアオスジアゲハは植栽されたクスノキを食草として開けた場所に多く見られます。しかし、川のそばで緩やかに飛ぶのはジャコウアゲハです。分布図からジャコウアゲハは入間川や小畔川沿い、寺尾調節池などがその生息場所に限定されていて、その理由は水辺を好む食草のウマノズクサの生息にあります。(※Figure 11、12) 水上公園では園内にサンクチュアリを作ってウマノズクサを育成しジャコウアゲハを保護しています。

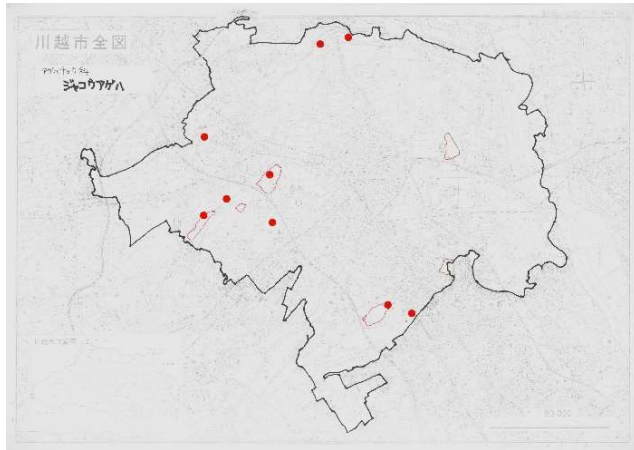


Fig.11 分布図 ジャコウアゲハ



Fig.12 ジャコウアゲハの保護地

シジミチョウ科では雑木林に依存して生息するゼフィルス（アカシジミ、ウラナミアカシジミ、ミズイロオナガシジミ）がいます。コナラやクヌギなどを食草としてクリの花で吸蜜しています。特にウラナミアカシジミは手入れの行き届いた雑木林を好んで生息していますので、放置された林が多くなってきている現状では、かろうじて生き延びている状況でしょう。（※Figure 13）

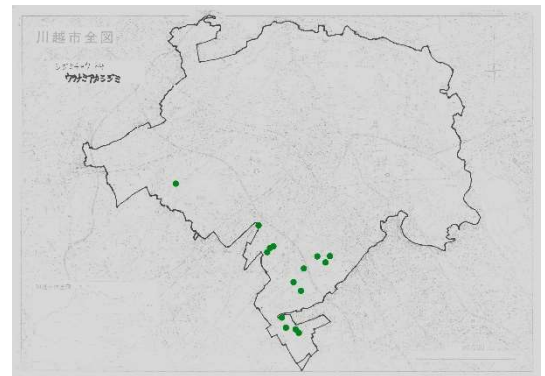


Fig.13 ウラナミアカシジミ

ヤマトシジミはチョウの中で2番目に多く分布しており、食草のカタバミが生息できる狭くても多くの場所で見ることができ、その期間も3月から12月までに及んでいます。（※Figure 14）

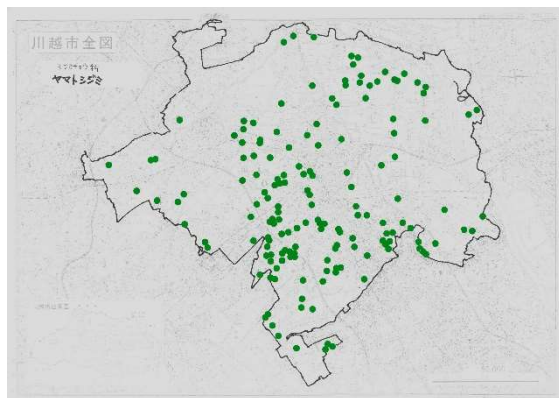


Fig. 14 ヤマトシジミ

明るい環境を好むベニシジミは河川敷や広い草地で早春からよく見かけます。また、マメ科の害虫としてのウラナミシジミは秋になると家庭菜園で多く見ることができます。

シロチョウ科では何といっても最も多い地域で見られるのはモンシロチョウです。春の代表として3月にはその姿を見せてく



Fig. 15 ベニシジミ

れます。分布状況から見ると市内のほとんどの地域で見ることができますし、水田農家の家庭菜園（特にキャベツ）や耕作放棄地のアブラナ科植物に依存して多く見られます。（※Figure 16）モンシロチョウと似ているスジグロシロチョウは比較的暗い環境を好み、林の林縁で飛翔し野生のアブラナ科植物を食草としています。観察が

進むにつれて見つかる場所が増えてきています。

減少が心配されていたツマキチョウも外来のアブラナ科植物に依存して観察例が増加しています。2023年に今福北の児童公園でも見かけました。

翅の色が黄色で良く目立つキタキチョウとモンキチョウはその生息範囲を大まかに分けています。モンキチョウは明るく開けた河川敷や農地周辺を中心に分布しており、シロツメクサなどのマメ科の植物を食草としており、その生息地は明るい場所となっています。一方キタキチョウはメドハギなどハギ科、ネムノキなどのマメ科を食草としており、林縁やそこに続く草地などに多く見られます。そして越冬はチョウで行い、雑木林で「くずはき」をしていると落葉の下から不意に飛び出します。両者ともに市内の広い範囲で見ることができモンシロチョウと並んで代表的なチョウになっています。

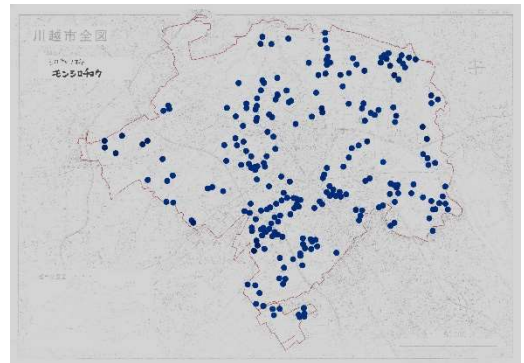


Fig.16 モンシロチョウ

セセリチョウ科ではイチモンジチョウを除いては市内であまり見つからない珍しい種が多く属しています。イチモンジセセリは越冬した個体が水田で発生し増殖しながら移動分散を行い、秋になると爆発的に増えて、ニラなどの花を訪れ、明るく開けた河川敷など群れで見られます。寺尾調節池では土手のアレチウリの花で吸蜜しているのを多数見つかっています。

ダイミョウセセリはヤマノイモを食草とし林縁で見られ、キマダラセセリはアズマネザサなどを食草にしており、両者とも林縁でたまに見ることができます。また、ギンイチモンジセセリは見つかっている場所が数カ所です。このチョウはススキを食草として、河川敷の草原でよく見かけます。寺尾調節池や安比奈親水公園のみでしたが、観察が進み豊田本町の水田地域や池辺公園と入間川沿いで報告がされています。しかし、埼玉県では準絶滅危惧種となっており観察の継続が必要でしょう。ミヤマセセリは丘陵地のチョウで川越では「中福のふるさと緑の景観地」のみで観察されています。このチョウは手入れが行き届いた明るい雑木林での生息となるので、雑木林とその環境が保全されなければ姿を消すことになるでしょう。



Fig. 17 キマダラセセリ

タテハチョウ科は市内でチョウの種数が最も多いチョウです。大きさも中型で明るく開けた草原から雑木林の中まで広範囲に分布しています。コムスジはクズを食草としており林縁でよく見かけます。キタテハはカナムグラが食草で明るく開けた河川敷や農地近くの草地に見られ、チョウで越冬して早春からその姿を見られます。このチョウは比較的広い範囲で観察することができます。

雑木林に依存しているサトキマダラヒカゲとヒカゲチョウは主な分布は限られています。社寺林や農家の屋敷林で見られることもできます。どちらのチョウも日本固有種でアズマネザサなどのイネ科の植物を食草として比較的暗い環境を好みます。また、訪花性はほとんどなく樹液を主な餌としています。広く分布しているのは新たに移動したのか元から生息していたのかを考えられますが、主な生息地では移動行動は大きくないので以前から生息している可能性が高いと考えられます。

水辺環境に多いヒメウラナミジャノメは市内の水辺で見つかっておりその分布は広がっています。川や水路を観察すればその分布が明らかになると思います。

ゴマダラチョウとヒオドシチョウはエノキを食草として雑木林に分布しています。しかし、林の樹の高齢化により樹液が少なくなり、雑木林そのものも減少しており、その分布は限定されていますのでヒオドシチョウは絶滅危惧Ⅱ類となっています。春先にチョウで現れ、樹液を餌としており、夏眠したり山地に移動したりすると言われています。

イチモンジチョウ、テングチョウ、ルリタテハは雑木林のチョウでイチモンジチョウはスイカズラを食草とし、テングチョウはエノキを食草とし林縁で活動します。ルリタテハはサルトリイバラ、シオデを食草としてチョウで越冬して早春の温かい日にその姿を現します。越冬場所は枯れ葉の下などで、落ち葉を集めた場所から越冬中のチョウを見つけました。

川越で固有種ではなく温暖化や意図的放チョウで定着し分布を拡大しているのはツマグロヒョウモンとアカボシゴマダラです。タテハチョウの中でも多くの場所で観察されているために市内では広範囲に分布していると考えられます。ツマグロヒョウモンの食草は栽培種スミレで特にパンジー種のスミレの植栽と温暖化と合わせて急速に広がり、4月から12月まで見られるようになりました。2000年ころから関東にも広がり現在は北上を続けています。(※Figure 18) 意図的放チョウによるアカボシゴマダラは外来種で1998年には神奈川で記録されて以来川越で定着してその分布を広げています。エノキを食樹として、在来種のゴマダラチョウと樹液をめぐる競争関係にあり、今福のヤマで樹液にきたチョウを調べたところアカボシゴマダラ：ゴマダラチョウは9：1で体長が大きいアカボシゴマダラが優先していました。

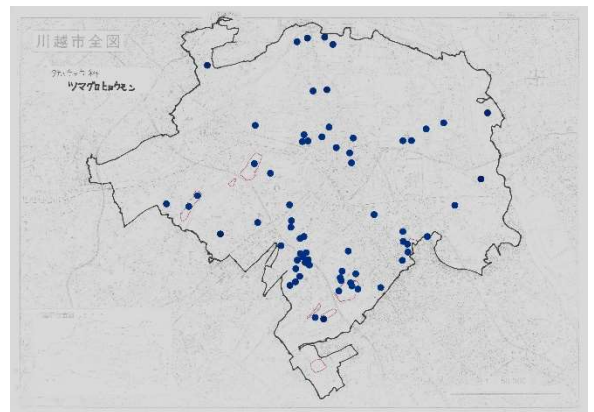


Fig.18 ツマグロヒョウモン

また、河川そばに生息しているコムラサキはヤナギを食樹としており、生息地域は数カ所に限定されています。アサマイチモンジは明るい雑木林や河川堤防で見つかり、イボタノキやスイカズラに訪花します。

5 環境の違いによるチョウ

これまでの調査結果から、寺尾調節池、(仮称)川越森林公園計画地、とメッシュ 5339-6357の3カ所で環境とチョウの関係について分析してみました。

(1) メッシュコード内のチョウ

メッシュコード 5339-6357 (川越市今福) で、これまで 216 件のチョウを観察してきました。このメッシュの中には雑木林 (3カ所以上)、畑地とそれに続く農家、また広い地域での住宅地と異なった環境が一部混在して存在しています。そのためにこのメッシュのチョウは一律に論じられないので、環境ごとに観察されたチョウを分けて環境にどのように依存しているのか考えてみました。(下の表)

環境の違いでチョウの種数と種類は変わり、雑木林や林縁の多様性が高い環境では 45 種、開放的な空間が多い畑と住宅地では各々 26 種となっています。雑木林はコナラを中心とした樹木が多く林縁にはつる植物が生えており、多くのチョウの生息場所となっています。

畑とそれに続く農家は開放的な空間と栽培植物の存在と農家の樹木がわずかに存在します。

住宅地と空き地は植栽と草地在り広がっており開けた空間となっています。

この 3 類の環境に共通する種は 21 種で、アゲハチョウ科は行動力が高いので広い環境で見ることができます。シジミチョウ科、やシロチョウ科のチョウは広く分布しているチョウが主で、イチモンジセセリは秋にどこでも見ることができるチョウです。



Fig. 19 虫さがし

	種名	科名	雑木林と林縁	畑と農家	住宅地や空き地
1	アオスジアゲハ	アゲハチョウ	○	○	○
2	キアゲハ	アゲハチョウ	○	○	○
3	クロアゲハ	アゲハチョウ	○	○	○
4	ナミアゲハ	アゲハチョウ	○	○	○
5	ウラギンシジミ	シジミチョウ	○	○	○
6	ツバメシジミ	シジミチョウ	○	○	○
7	ヤマトシジミ	シジミチョウ	○	○	○
8	ルリシジミ	シジミチョウ	○	○	○
9	キタキチョウ	シロチョウ	○	○	○
10	モンキチョウ	シロチョウ	○	○	○
11	モンシロチョウ	シロチョウ	○	○	○
12	イチモンジセセリ	セセリチョウ	○	○	○
13	アカタテハ	タテハチョウ	○	○	○
14	アカボシゴマダラ	タテハチョウ	○	○	○
15	イチモンジチョウ	タテハチョウ	○	○	○
16	キタテハ	タテハチョウ	○	○	○
17	コムスジ	タテハチョウ	○	○	○
18	ツマグロヒョウモン	タテハチョウ	○	○	○
19	テングチョウ	タテハチョウ	○	○	○
20	ヒカゲチョウ	タテハチョウ	○	○	○
21	ルリタテハ	タテハチョウ	○	○	○
22	カラスアゲハ	アゲハチョウ	○		○
23	ナガサキアゲハ	アゲハチョウ	○		○
24	ベニシジミ	シジミチョウ	○	○	
25	ムラサキシジミ	シジミチョウ	○	○	
26	ダイミョウセセリ	セセリチョウ	○		○
27	クロコノマチョウ	タテハチョウ	○		○
28	ゴマダラチョウ	タテハチョウ	○	○	
29	サトキマダラヒカゲ	タテハチョウ	○		○
30	ヒメアカタテハ	タテハチョウ	○	○	
31	ミドリヒョウモン	タテハチョウ	○	○	
32	オナガアゲハ	アゲハチョウ	○		
33	アカシジミ	シジミチョウ	○		
34	ウラナミアカシジミ	シジミチョウ	○		
35	ウラナミシジミ	シジミチョウ	○		
36	ミズイロオナガシジミ	シジミチョウ	○		
37	ムラサキツバメ	シジミチョウ	○		
38	スジグロシロチョウ	シロチョウ	○		
39	ツマキチョウ	シロチョウ	○		
40	キマダラセセリ	セセリチョウ	○		
41	コチャバネセセリ	セセリチョウ	○		
42	チャバネセセリ	セセリチョウ	○		
43	ヒメキマダラセセリ	セセリチョウ	○		
44	ヒオドシチョウ	タテハチョウ	○		
45	ヒメウラナミジャノメ	タテハチョウ	○		
			45	26	26

タテハチョウ科は温暖化や意図的放チョウで分布を広げているアカボシゴマダラ、栽培種
のホトトギスで生存を繋いでいるルリタテハなどが3カ所の広い環境で見られます。

伝統的な管理をしている雑木林と林縁にしか見られないのは14種でこれらのチョウは食
草や蜜源と生活場所が林やその林縁に限定されるからです。特にシジミチョウ、シロチョウ、
セセリチョウ科は林に依存して生き続けていることが判ります。アカシジミなどのゼフィル
スやヒオドシチョウ、ムラサキツバメといったチョウは雑木林に依存しており、その林がな
くは生息できません。ゴマダラチョウやサトキマダラヒカゲも樹液や比較的暗い環境が必
要とする林のチョウですが、農家の熟れた柿の木で見ることがあり林との行き来が推察され
ます。セセリチョウもキマダラセセリやコチャバナセセリといったチョウはイネ科の食草や
林縁を必要としており、林でしか見られません。

様々な環境がパッチ状に分布しておりその境は移行的となっていますので明瞭に分ける
ことはできませんが、おおよその傾向は掴めるかと思えます。林の中でチョウの生活が完結
しているチョウと食草や餌を求めて分布を広げるチョウと開かれた場所と栽培された食草
に依拠しているチョウとの違いが判ってきました。



Fig. 20 住宅地



Fig. 21 農地周辺

(2) 寺尾調節池

調節池は広い開放的な空間と広い水辺と湧水を持ち、植生は水辺周辺にヤナギなどが生育
し、土手や水辺付近では草地が広がっています。もう1カ所は新河岸川沿いに屋敷林を兼ね
た河畔林が広がっており比較的暗い環境と湧水がつくる湿地が存在しています。このよう
に環境の異なった場所でのチョウの観察結果から環境によるチョウの変化を考えてみます。

表(19ページ)はこれまでの観察結果をまとめたものです。両方の環境に共通する種数
は18種で全体の観察数から見ると調節池は32種と屋敷林・河畔林は19種で調節池が多く
なっています。

調節池と屋敷林・河畔林は近接しているため、チョウの交流移動の多いことが判ります調
節池だけで見つかったのは14種で、屋敷林・河畔林では1種となっています。

調節池だけで見られるチョウは、飛行力が高いアゲハチョウ科のチョウや明るい環境を好むセセリチョウ科が多くいます。また、食草の存在がその生息を助けています。ススキを食草とするギンイチモンジセセリやヤナギ類を食草とするコムラサキも見られ、ヒメウラナミジャノメが多く、明るく開けた環境を好むアカタテハ、ヒメアカタテハやアサマイチモンジが見られるのが調節池の特徴です。しかし、2020年にヤナギ類の伐採が行われたことでコムラサキがその姿を消しました。

河畔林では蜜源となる植物もありクロアゲハが見られます。また、日影があることでヒカゲチョウが見られます。そして、ミヤマチャバネセセリやウラギンシジミが見つかり調節池とは異なったチョウが見られます。この河川敷の周辺には草地が広がり、食草のカナムグラが繁茂しており、多くのキタテハが見られます。

科名	亜科名	種名	寺尾調節池	河畔林
アゲハチョウ	アゲハチョウ	アオスジアゲハ	○	○
		オナガアゲハ		
		カラスアゲハ	○	
		キアゲハ	○	○
		クロアゲハ	○	○
		ジャコウアゲハ		
		ナガサキアゲハ	○	○
		ナミアゲハ	○	
シジミチョウ	ウラギンシジミ	ウラギンシジミ		○
	シジミチョウ	アカシジミ		
		ウラゴマダラシジミ		
		ウラナミアカシジミ		
		ウラナミシジミ	○	○
		ゴイシジミ		
		ツバメシジミ	○	○
		トラフシジミ		
		ベニシジミ	○	○
		ミズイロオナガシジミ		
		ムラサキシジミ	○	
		ムラサキツバメ		
		ヤマトシジミ	○	○
ルリシジミ				
シロチョウ	モンキチョウ	キタキチョウ	○	○
	モンシロチョウ	ツマキチョウ		
		モンキチョウ	○	○
		スジグロシロチョウ		
セセリチョウ	セセリチョウ	イチモンジセセリ	○	
	チャマダラセセリ	キマダラセセリ		
		ギンイチモンジセセリ	○	
		オオチャバネセセリ	○	
		コチャバネセセリ		
		ダイミョウセセリ		
		チャバネセセリ	○	
		ヒメキマダラセセリ		
		ホソバセセリ		
		ミヤマセセリ		
ミヤマチャバネセセリ	○			
タテハチョウ	タテハチョウ	アカタテハ	○	
		アカボシゴマダラ	○	○
		ウラギンヒョウモン		
		キタテハ	○	○
		コムスジ	○	○
		ツマグロヒョウモン	○	○
		ヒメアカタテハ	○	
		ミドリヒョウモン		
		ルリタテハ	○	
	テングチョウ	テングチョウ		
	イチモンジチョウ	アサマイチモンジ	○	
		イチモンジチョウ		
		ミスジチョウ		
	マダラチョウ	アサギマダラ		
	コムラサキ	ゴマダラチョウ		
		コムラサキ	○	
	ジャノメチョウ	ヒオドシチョウ		
		ウラナミジャノメ	○	
		クロコノマチョウ		
コジャノメ				
サトキマダラヒカゲ				
ジャノメチョウ				
ヒカゲチョウ		○	○	
ヒメウラナミジャノメ		○	○	
ヒメジャノメ	○	○		



Fig. 22 寺尾調節池



Fig. 23 屋敷林と河畔林

6 チョウによる環境指標

チョウとその住む環境についていくつかの研究方法が提示されています。巢ノ瀬氏（埼玉昆虫談話会）はルート・センサスの必要性を提案しています。そしてこの方法で世界的な調査が行われているトランセクト調査として実施されています。これは1ないし2 kmのルートを選定し5 m幅で週1回（最低月2回）チョウの種類と個体数を調べることでその地域のチョウの変化が判ります。そしてルートセンサで得られたデータは環境評価に用いることができると報告しています。その解析方法は2通りあり、「チョウのそれぞれの種がいるかないか」の定性的解析、もう一つはチョウの種ごとの個体数を用いた定量的な解析です。これはあくまでも「チョウが生息しやすい環境」なのかを評価するものです。

私たちの調査はこの基準を満たすことのない観察結果なのですが、不十分な結果からでも調査地点の環境評価を試行的に行ってみました。（「初心者のための蝶のルート・センサス その2」 巢瀬 司 やどりが第179号（1998）から引用させていただきました）

環境指数によるチョウにとっての環境の分類		
環境指数	環境	具体的な環境
0～9	貧自然	都市中央部
10～39	寡自然	住宅地・公園緑地
40～99	中自然	農村・人里
100～149	多自然	良好な林や草原
150～	富自然	極めて良好な林や草原

- (1) この環境評価を「(仮称)川越森林公園計画地」で行ってみました。森林公園計画地は平地林が広がっており、林や畑や草地がモザイク状に分布しており、その面積も約40haと広く多様な環境があり、そこに適応しているチョウが生息しています。ゼフィルス3種はコナラ・クヌギ林に生息しており、比較的暗い場所を好むサトキマダラヒカゲ、ゴマダラチョウなどと林や林縁など林の環境に依存したチョウが多く生息しています。また、畑や草地にはモンシロチョウやキタキチョウ、キタテハなど開けた場所に多く生息するチョウも見られます。そしてその指数は82となり中自然の上位に該当します。(21 ページ参照)

地域別チョウの出現による環境指標				
科名	亜科名	種名	森林公園 計画地 寺尾調節 池	
アゲハチョウ	アゲハチョウ	アオスジアゲハ	1	1
		オナガアゲハ		
		カラスアゲハ	3	3
		キアゲハ	2	2
		クロアゲハ	2	2
		ジャコウアゲハ	2	
		ナガサキアゲハ	1	1
		ナミアゲハ	1	1
		モンキアゲハ		
シジミチョウ	ウラギンシジミ	ウラギンシジミ	2	
	シジミチョウ	アカシジミ	2	
		ウラゴマダラシジミ		
		ウラナミアカシジミ	2	
		ウラナシジミ	1	1
		ゴイシジミ		
		ツバメシジミ	2	2
		トラフシジミ		
		ベニシジミ	1	1
		ミズイロオナガシジミ	2	
		ムラサキシジミ	2	2
		ムラサキツバメ	2	
		ヤマトシジミ	1	1
		ルリシジミ	2	
シロチョウ	モンキチョウ	キタキチョウ	2	2
		ツマキチョウ		
		モンキチョウ	2	2
	モンシロチョウ	スジグロシロチョウ	1	
		モンシロチョウ	1	1
セセリチョウ	セセリチョウ	イチモンジセセリ	1	1
		キマダラセセリ	2	
	チョウセンキボシセセリ	ギンイチモンジセセリ		3
		オオチャバネセセリ	2	2
		コチャバネセセリ		
		ダイミョウセセリ	2	
		チャバネセセリ	2	2
		ヒメキマダラセセリ		
		ホソバセセリ		
		ミヤマセセリ		
ミヤマチャバネセセリ		3		
タテハチョウ	タテハチョウ	アカタテハ	2	2
		アカボシゴマダラ	1	1
		ウラギンヒョウモン		
		キタテハ	2	2
		コムスジ	2	2
		ツマグロヒョウモン	1	1
		ヒメアカタテハ	2	2
		ミドリヒョウモン	2	
		ルリタテハ	2	2
		テングチョウ	テングチョウ	2
	イチモンジチョウ	アサマイチモンジ	2	2
		イチモンジチョウ	2	
		ミスジチョウ	3	
	マダラチョウ	アサギマダラ		
	コムラサキ	ゴマダラチョウ	2	
		コムラサキ		2
		ヒオドシチョウ	2	
	ジャノメチョウ	ウラナミジャノメ		3
		クロコノマチョウ	3	
		コジャノメ		
		サトキマダラヒカゲ	2	
		ジャノメチョウ		
		ヒカゲチョウ	2	2
ヒメウラナミジャノメ		2	2	
ヒメジャノメ		2		
環境指標合計			82	58

(2) 寺尾調節池は開けた環境で水辺が存在し、土手の草地と水辺のヤナギの樹林と特徴ある自然環境となっています。そこにはギンイチモンジセセリやチャバネセセリなどのセセリチョウ科のチョウが多く見ることができます。ヤナギを食草とするコムラサキも見ることができます。また、開放的な草地空間があり、明るい場所を好むベニシジミ、ツバメシジミ、ヒメジャノメ、ヒメウラナミジャノメが多く見られます。そして寺尾調節池の環境指数は58となり、中自然ですが開放的な空間が多くあるので指数は中位となっています。(左の表)

(3) 住宅地と家庭菜園の場所でチョウを観察すると17種のチョウで指数は26となり、環境評価は住宅地に一致しました。(表はありません)

的確なチョウの調査ではありませんが、評価方法として3カ所の環境指数は妥当な数値を示しています。

Fig. 24 チョウの環境指数

7 川越のチョウの歴史

川越のチョウの歴史は、環境の変化からチョウ相がどのように変化したのか、まだ十分に解明できていません。これまでの資料では、埼玉昆虫談話会の「埼玉県昆虫誌」(1998年発行)、島村一男氏の「新河岸川中流域(川越市)の水・川辺環境誌ノート」(平成13年)、および馬場氏(私信)(1956年 当時:川越市霞ヶ関在住)の記録が残されています。また、2018年に埼玉県レッドデータ動物編が発行されており、これらの資料を基に、川越市内のチョウの変遷について考えます。

下の表は1977年以前と現在のチョウの出現を比較した表です。全部で78種類が川越でこれまで知られています。過去に生息して現在は生存が確認されていないチョウは16種います。原因が推測できるチョウもいますがオオムラサキ、オオミドリシジミ、クロヒカゲは不明のままです。

ウスバシロチョウなど12種類(◎)は、本来の生息地が丘陵地域から低山なので温暖化や環境悪化などによって川越では生息できなくなったのではないかと推測できます。クロシ

	種名	科名	1977年以前	現在		種名	科名	1977年以前	現在
1	コツバメ	シジミチョウ	—	—	8	モンキアゲハ	アゲハチョウ	○	○
1	ウスバシロチョウ	アゲハチョウ	◎	—	9	アカシジミ	シジミチョウ	○	○
2	ミヤマカラスアゲハ	アゲハチョウ	◎	—	10	ウラギンシジミ	シジミチョウ	○	○
3	オオミドリシジミ	シジミチョウ	◎	—	11	ウラナミアカシジミ	シジミチョウ	○	○
4	クロシジミ	シジミチョウ	◎	—	12	ウラナミシジミ	シジミチョウ	○	○
5	ツマグロキチョウ	シロチョウ	◎	—	13	ツバメシジミ	シジミチョウ	○	○
6	トラフシジミ	シジミチョウ	◎	—	14	ベニシジミ	シジミチョウ	○	○
7	エゾスジグロシロチョウ	シロチョウ	◎	—	15	ミズイロオナガシジミ	シジミチョウ	○	○
8	オオムラサキ	タテハチョウ	◎	—	16	ヤマトシジミ	シジミチョウ	○	○
9	クジャクチョウ	タテハチョウ	◎	—	17	ルリシジミ	シジミチョウ	○	○
10	クモガタヒョウモン	タテハチョウ	◎	—	18	キタキチョウ	シロチョウ	○	○
11	クロヒカゲ	タテハチョウ	◎	—	19	スジグロシロチョウ	シロチョウ	○	○
12	ヤマキヒカゲマダラ	タテハチョウ	◎	—	20	ツマキチョウ	シロチョウ	○	○
1	ウラナミジャノメ	タテハチョウ	—	△	21	モンキチョウ	シロチョウ	○	○
2	ヒメキマダラセセリ	セセリチョウ	△	△	22	モンシロチョウ	シロチョウ	○	○
3	ホソバセセリ	セセリチョウ	△	△	23	イチモンジセセリ	セセリチョウ	○	○
4	ウラギンヒョウモン	タテハチョウ	△	△	24	オオチャバネセセリ	セセリチョウ	○	○
5	ウラゴマダラシジミ	シジミチョウ	○	△	25	キマダラセセリ	セセリチョウ	○	○
6	ゴイシシジミ	シジミチョウ	○	△	26	ギンイチモンジセセリ	セセリチョウ	○	○
7	ミドリシジミ	シジミチョウ	○	△	27	コチャバネセセリ	セセリチョウ	○	○
8	コジャノメ	タテハチョウ	○	△	28	ダイミョウセセリ	セセリチョウ	○	○
1	ナガサキアゲハ	アゲハチョウ	—	○	29	チャバネセセリ	セセリチョウ	○	○
2	ムラサキシジミ	シジミチョウ	—	○	30	ミヤマチャバネセセリ	セセリチョウ	○	○
3	ムラサキツバメ	シジミチョウ	—	○	31	アカタテハ	タテハチョウ	○	○
4	アカボシゴマダラ	タテハチョウ	—	○	32	イチモンジチョウ	タテハチョウ	○	○
5	クロノマチョウ	タテハチョウ	—	○	33	キタテハ	タテハチョウ	○	○
6	リュウキュウムラサキ	タテハチョウ	—	○	34	ゴマダラチョウ	タテハチョウ	○	○
1	ミヤマセセリ	セセリチョウ	▲	○	35	コムスジ	タテハチョウ	○	○
2	アサギマダラ	タテハチョウ	▲	○	36	コムラサキ	タテハチョウ	○	○
3	アサマイチモンジ	タテハチョウ	▲	○	37	サトキマダラヒカゲ	タテハチョウ	○	○
4	ツマグロヒョウモン	タテハチョウ	▲	○	38	ジャノメチョウ	タテハチョウ	○	○
5	テングチョウ	タテハチョウ	▲	○	39	ヒオドシチョウ	タテハチョウ	○	○
1	アオスジアゲハ	アゲハチョウ	○	○	40	ヒカゲチョウ	タテハチョウ	○	○
2	オナガアゲハ	アゲハチョウ	○	○	41	ヒメアカタテハ	タテハチョウ	○	○
3	カラスアゲハ	アゲハチョウ	○	○	42	ヒメウラナミジャノメ	タテハチョウ	○	○
4	キアゲハ	アゲハチョウ	○	○	43	ヒメジャノメ	タテハチョウ	○	○
5	クロアゲハ	アゲハチョウ	○	○	44	ミスジチョウ	タテハチョウ	○	○
6	ジャコウアゲハ	アゲハチョウ	○	○	45	ミドリヒョウモン	タテハチョウ	○	○
7	ナミアゲハ	アゲハチョウ	○	○	46	ルリタテハ	タテハチョウ	○	○

◎◎ 生息確認 △▲ 不明 — 不存在

Fig. 25 チョウの変化一覧

ジミは雑木林の開発や手入れの放棄と草地などの消失により、共生するクロオオアリが減少したことによって関東では絶滅しています。ミドリシジミ、ゴイシジミはそれらの生息環境が今でも存在しているので観察が不足しているのもしれません。

過去に見かけなかったチョウで現在市内に見かけるチョウはナガサキアゲハを含めて 6 種類 (○) いますが、これらは温暖化や意図的放チョウによって 1990 年代から急速に定着し繁殖を続けています。(リュウキュウムラサキは 1 度だけです) 過去に不明で現在観察されているチョウは 5 種 (▲) います。ツマグロヒョウモンを除く 4 種は観察されていないだけで川越に存在しなかったとは断言できませんし、ミヤマセセリ、アサマイチモンジ、テングチョウは現在の観察結果から見て、むしろ存在していたのではないかと推察しています。

他の 46 種は過去も現在も川越で観察されています。観察される場所が広範囲にわたるか、狭い範囲のみで生息しているかの違いはありますが、時期と場所を把握できれば観察すること

とはできます。今後、どのようにチョウの生息分布が変化するかは、温暖化や開発の程度によるでしょう。そのためにチョウの現状を把握し資料を次世代に残すことは大切なことで今を生きる私たちの大切な役割です。

左図 林の貴婦人ールリタテハーの終齢幼虫から羽化までをまとめました。

実際に個人宅のホトトギスで生長してチョウになった実際の記録です。羽化する様子が時間を追って見られます。

早春に成虫で越冬したチョウが姿を現し年 2 回の羽化をして 10 月には越冬成虫 (チョウ) となり寒い冬を林の中で過ごします。



8 川越で見られるチョウたち



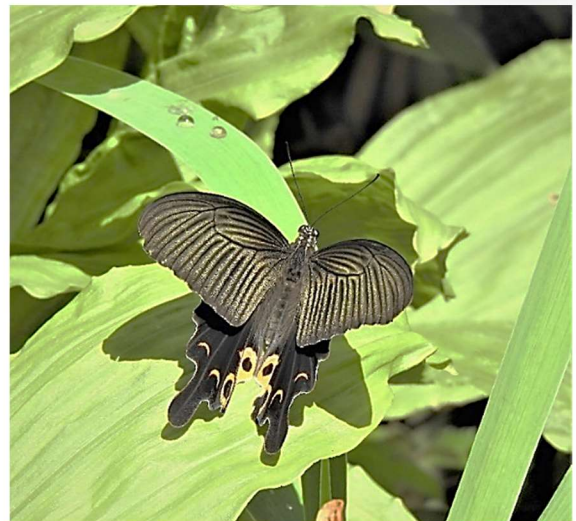
アオスジアゲハ



カラスアゲハと幼虫



キアゲハと幼虫



クロアゲハ



ジャコウアゲハ



ナガサキアゲハ



ナミアゲハ



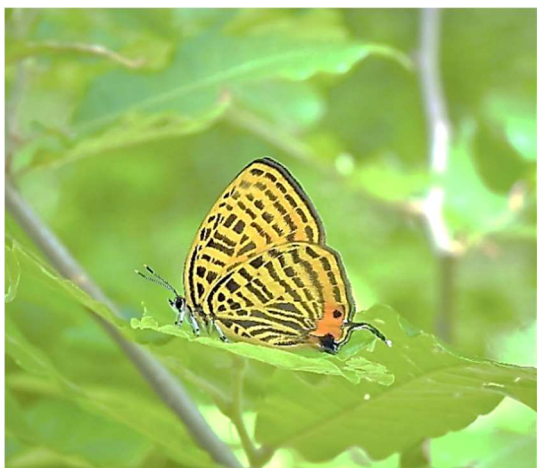
ウラギンシジミ



千日紅の花にウラナミシジミ



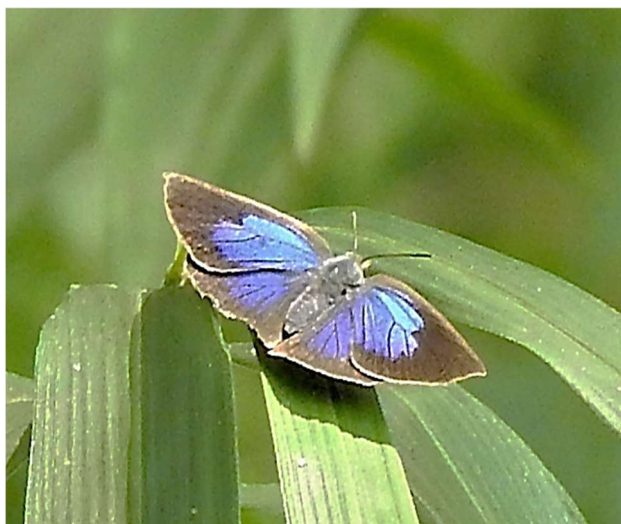
アカシジミ



ウラナミアカシジミ



ミズイロオナガシジミ



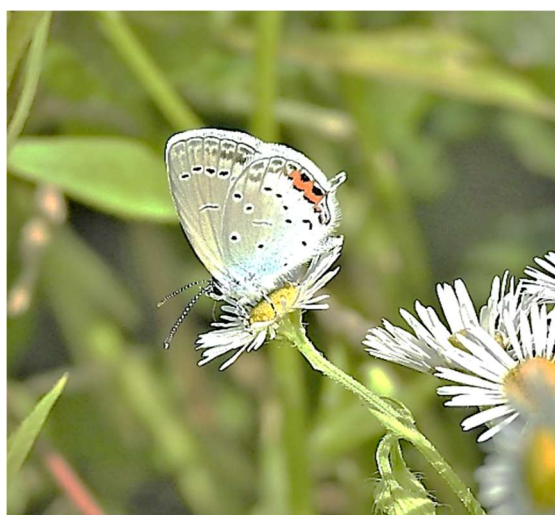
ムラサキシジミ



ムラサキツバメ



ヤマトシジミ



ヒメジョオンにツバメシジミ



ルリシジミ



ベニシジミ



コウヤボウキの花にキタキチョウ



キツネアザミにスジグロシロチョウ



モンキチョウ



モンシロチョウ



ツマキチョウ



ミヤマセセリ



イチモンジセセリ



オオチャバネセセリ



キマダラセセリ



コチャバネセセリ



ギンイチモンジセセリ



ダイミョウセセリ



ツメクサにチャバネセセリ



ミヤマチャバネセセリ



樹液にヒオドシチョウ



樹液にアカタテハ



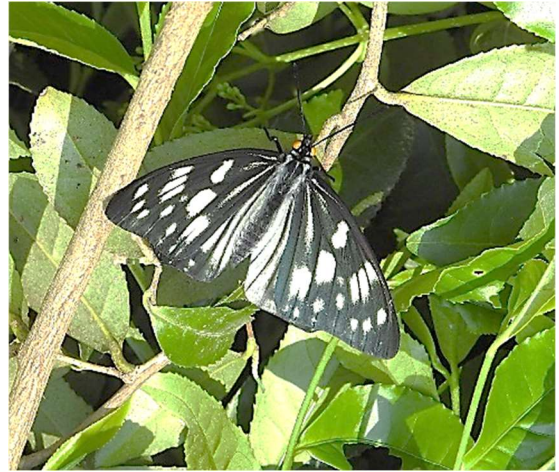
キタテハ



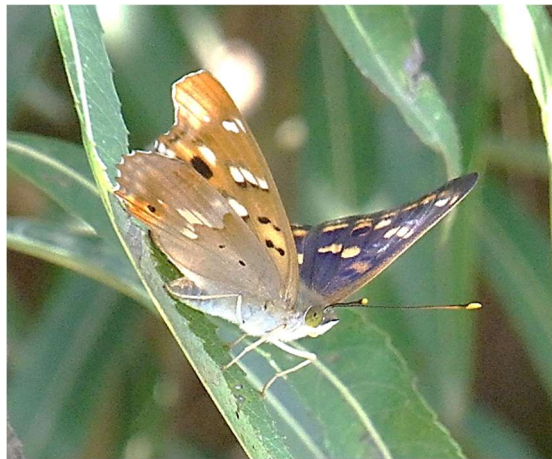
クロコノマチョウ



アカボシゴマダラ



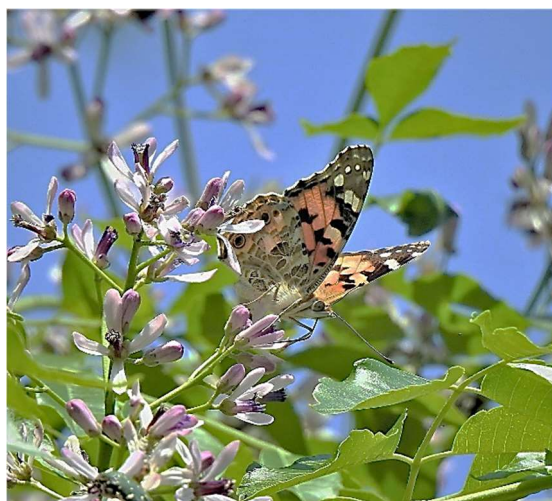
ゴマダラチョウ



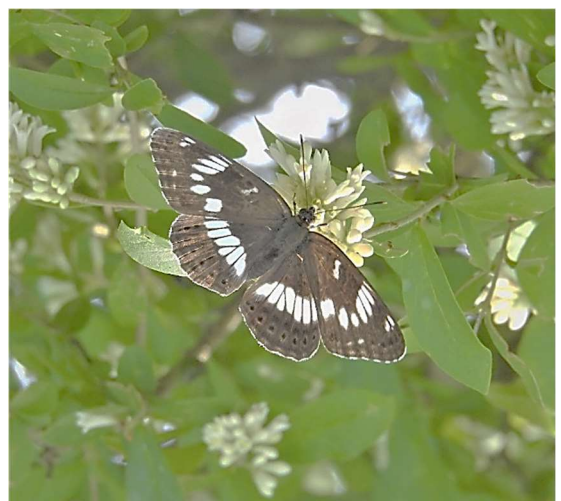
コムラサキ ♂



コムラサキ ♀



センダンの花にヒメアカタテハ



アサマイチモンジ



イチモンジチョウ



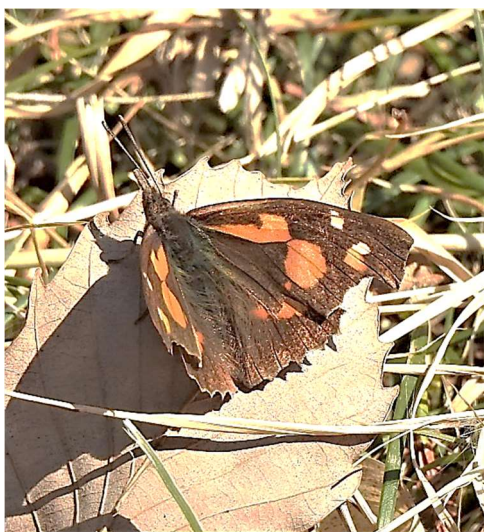
ウラナミジャノメ



コナラの樹液にサトキマダラヒカゲ



ヒカゲチョウ



テングチョウ



交尾するツマグロヒョウモン



ヒメウラナミジャノメ



ヒメジャノメ



コムスジ



ミスジチョウ



ルリタテハ



ミドリヒョウモン

9 川越のチョウの未来は

(1) チョウの生態的地位は

チョウのイメージは可憐で優雅で儂いものの印象が強いのですが、その本当の役割は芋虫の時代は野鳥や昆虫の餌となり、春の渡りや子育てを支えます。成虫のチョウになると花を訪れて花粉の媒介を手伝います。そして寿命が尽きるとアリや食虫昆虫の餌となります。このようにチョウは生態系の一部を担い上位の消費者としての昆虫や野鳥の生息を維持する役割を持ち生態系の多様性を維持するためにはなくてはならない存在です。

その上、チョウの幼虫は草本類を食草とし、成虫のチョウになってからは蜜源としての草花や樹液を必要とし、また暗い環境や林縁や開けた環境などの場所に適応してほぼ決まった場所で生息しています。そのため環境の変化に敏感で、生息する地域のどの環境が変化してもその生存が困難となります。また、幼虫と成虫（チョウ）の生息環境が異なり、チョウが生き続けられるためには多様な環境が必要としています。そのことからチョウはその盛衰を通じて環境の変化をいち早く私たちに知らせてくれます。

(2) 市内環境によるチョウの変化

川越では毎年 50 種ほどが観察され、平地林、河畔林、河川敷の草地、家庭菜園、住宅地、空き地とそこに生息している食草や蜜源など多様な環境がチョウの生息を支えています。チョウを通して市内の環境を考えてみると、雑木林が開発で失われたり、手入れがされずに荒れ果ててしまったりすると、雑木林のコナラに依存しているゼフィルス（ウラナミアカシジミ、アカシジミ、ミズイロオナガシジミ）はその生存が危機的となります。現在 4,5 か所でしかその姿を見ることができないゼフィルスが多く住む雑木林の 1 か所が、2020 年に農業用ビニールハウスになってしまい、他の生きものと一緒に失われてしまいました。

このように雑木林の保全とその管理が失われるとこれらのチョウは絶滅する恐れがあります。1990 年代に武蔵野から絶滅したクロシジミの二の舞は避けたいものです。

河川敷の広さが大きく土手などに広い範囲で草地が広がって開放的な空間に蜜源の草本もあり多くのチョウが見られます。この中で水辺近くを好むウマノスズクサを食草とするジャコウアゲハが入間川と小畔川の水系に生息しています。この場所は毎年過度の草刈りが行われ、食草のウマノスズクサが刈り取られ、ジャコウアゲハが絶滅の恐れを大きくしています。

(3) 絶滅が心配されるチョウたち

右の表は、川越で見られる埼玉県のチョウの絶滅危惧種の一覧です。ミドリシジミは昭和 30 年代には川越で見られたのですが現在は確認さ

種名	ランク
ヒオドシチョウ	絶滅危惧Ⅱ類
ミヤマセセリ	準絶滅危惧Ⅰ型
ゴイシジミ	準絶滅危惧Ⅱ型
オオチャバネセセリ	準絶滅危惧Ⅱ型
ギンイチモンジセセリ	準絶滅危惧Ⅱ型
コチャバネセセリ	準絶滅危惧Ⅱ型
ホソバセセリ	準絶滅危惧Ⅱ型
アサマイチモンジ	準絶滅危惧Ⅱ型
ウラギンヒョウモン	準絶滅危惧Ⅱ型
ジャノメチョウ	準絶滅危惧Ⅱ型
ミスジチョウ	準絶滅危惧Ⅱ型

れた情報はありません。ヒオドシチョウは絶滅危惧Ⅱ類ですが、他の10種は準絶滅危惧種となっています。このうち5種は市内での確認がされていますが、他の5種は不確実な確認か未確認の種で市内での絶滅が心配されま

す。
ミヤマセセリは中福のふるさと緑の景観地のみで生息しており、このチョウ

川越での希少種			
種名	食草	生息環境	指定の理由
カラスアゲハ	ミカン科	やや発達した森林環境	観察例が減少
ジャコウアゲハ	ウマノスズクサ	河川堤防、林縁	河川沿いに限定
アカシジミ	コナラ・クヌギ	雑木林	林の減少
ウラミアカシジミ	コナラ・クヌギ	萌芽更新の林を好む	林の減少
ミズイロオナガシジミ	コナラ・クヌギ	広葉樹林	林の減少
ツマキチョウ	アブラナ科	林縁や農地河原周辺の草地	観察例が減少
ゴマダラチョウ	エノキ	雑木林	観察例が減少
コムラサキ	ヤナギ	河畔林	観察例が減少

Fig. 26 川越での希少種へ

好んで棲息してい

ます。ギンイチモンジセセリは寺尾調節池、池辺公園、豊田本町、安比奈親水公園で観察されていますが、生息地が限られており絶滅が危惧されます。アサマイチモンジとコチャバネセセリとは観察地点が増えていますが危機的状況は改善されていません。他のチョウは市内で1回だけの観察結果ですので確認調査などが必要となっています。

この他に、市内で環境の悪化や生息場所の減少によって絶滅が気になる希少種は考えられます。これらのチョウは市内では数カ所で観察することができますが、生息する環境が過度な伐採や手入れ放棄で悪化し、競合種の存在が考えられたりして不安定な状況となっています。(上の表)

(4) チョウを含む生きものを保全するためには

チョウから見た川越の自然環境は、雑木林の減少と管理放棄、河川敷で野草の過度の伐採、水路のコンクリート化、温暖化や意図的放チョウにより川越のチョウ相は静かに変化してきているのではないかと心配されます。人間が地域を住みやすくし、農業生産を向上させることは大切なことですが、生きものとの共生を考えながら私たちの暮らしを環境保全型および持続可能な社会に進めることも大切になっています。

私たちに多大な恩恵を与えてくれる自然環境はプライスレスな価値を持っていますし、一度破壊するとその回復のためにはそれ以上の時間と費用がかかります。現在のままでこれらの自然環境を次世代に残し、荒れている自然は復活・再生させることが必要とされているのではないのでしょうか。

川越のチョウを守り、その基盤となる自然環境を保全するためには

- ① まず、チョウや自然について関心を持ってもらえればよいと思います。身近な場所にちょっと目を向けると多くの生きものに会うことができます。それらを記憶と共に記録として残してみてもどうでしょうか。
- ② 身近な場所からより自然度が高い場所へと関心を広げると視野が広がります。

そこでもっとチョウや生きものの生活が見ることができます。今後、生きものの生活から私たちの暮らしに役立つ情報を得ることができます。新しい発見があるかもしれません。失われてからでは遅すぎます。

- ③ 行政や事業者の責任も大切となっています。開発や事業の継続を行うためには生きものの住む自然環境のモニタリングを行い、それを環境配慮指針として活用してほしいと思います。失われた自然環境を取り戻すことは壊す以上の努力とお金が必要になってきます。
- ④ 現在、川越に存在する緑地（(仮称)川越森林公園計画地、ふるさと緑の景観地、市民の森など）や河川敷（入間川、小畔川）、寺尾調節池、仙波河岸公園、広い公園（水上公園、池辺公園、安比奈親水公園、伊佐沼公園など）、水田地帯の水路、市街地内の樹林地などの自然環境を保全することが大切となっています。その場所には絶滅危惧種や希少種のチョウや生きものが生息し健全な生態系を保ち生きものにとっての持続可能な環境となっています。
- ⑤ 破壊された自然環境を復活させる自然再生と現在残っている自然環境を保全することを両立させることが課題となっています。現在、放置された林に手を入れ親しみやすい林に戻す活動がわずかに行われています。そして、その作業を行うことで、絶滅しそうな植生を回復させてきています。さらに開発から元に戻す自然再生事業が河川等で行われているように、雑木林や水路、身近な環境でも行われることを期待します。

10 まとめを発行するにあたって

この12年間のチョウの調査結果は、かわごえ環境ネット自然環境部会で発行することができました。この調査に多くの市民が参加していただき、自宅周辺から始まって市内の広い範囲で観察を粘り強く続けていただきました。その集積が6500を超える観察データとなりほぼ市内全域で調査を終えることができました。このデータを解析し次世代への伝承とする役割を果たしえたと思います。チョウと環境と関係がまだ不十分ですが、チョウから見た川越の環境の変化を知る一里塚として活用いただき、今後より豊かな内容にしていいただければ幸いです。

これまでの結果から、川越市のチョウの現状は楽観できるものでないことはあきらかとなりました。今後、チョウやほかの生きものを観察しながら、人間と生きものが持続的に共生できる川越市の自然環境を模索したいと思います。

調査に参加された皆さん、写真を提供された菊地さん、宮澤さんや生きものの情報やまとめに多大な協力をいただいた皆さんに心から感謝とお礼を申し上げたいと思います。

2024年2月24日

かわごえ環境ネット 自然環境部会
猪俣 昇 過 昌司

追記

この冊子を発行した後に専門家からのコメントがあり、問題点の指摘がありました。特にウラナミジャノメですが関東には記録されていない種で写真での判定は複数の専門家からも疑問視されていました。本来は掲載するべきではなかったのですが、市民からの報告として他のホソバセセリなどでの同定困難種なども合わせて載せてきました。発行時期までに再観察を行ってきましたが、その存在を証明する証拠は見当たりませんでした。

次回からは専門家の協力も得てより正確な観察とまとめを行いたいと考えています。チョウから見た環境について問題提起にさせていただきます。(猪俣、過)

チョウを追う日々

